7/16 赤旗

今を生きる子どもたち Ⅱ ④

貧困と格差の拡大のなかで

つらいときでも笑えた

「今まで通ってきた学校の中でこの学校も先生も一番好き！」「つらいときでも笑えたし、幸せやったし、素直に楽しかった」「私の居場所があるって思った」「来てよかった」…。

卒業文集に子どもたちの学校への思いがあふれます。

大阪府貝塚市の私立秋桜高校。さまざまな事情で全日制の普通高校に入れなかったり、途中でやめてしまったりした生徒が通う通信制の高校です。

「学ぶことをあきらめている子が非常に多いですね。自分の存在を肯定できないでいるとか。そうした子どもたちにどういう援助ができるのか、いつも頭を悩ませています」と、同校の浦田直樹教諭は話します。

小中学校を不登校で過ごした生徒。成績が足りずに公立高校をあきらめてきた生徒。生活が荒れてしまって、気持ちが勉強に向かわない生徒。家計が大変ななかで「高校だけは卒業させたい」という親の思いを負担に感じている生徒もいます。

強制的な力排除

こうした生徒一人ひとりの実情を理解した上で、それぞれの学ぶ力を引き出そうと、教員たちが努力しています。担任の子どもだけでなく、すべての教職員がすべての生徒にかかわり、話し合いながら教育活動をすすめる学校です。

開校して15年、この学校には体罰、制服、管理、強制、競争はありません。規則や力で子どもを縛り、従わせるのではなく、一切の強制的な力を排除して子どもたち一人ひとりに向き合い、子どもたちの悩みに寄り添い、子どもたち自身が解決していく道筋を一緒に見つけていけたら、というのが同校のすべての教師の思いです。入学したいと希望する生徒はどんな事情があっても全員、受け入れます。

「日常的に、喫煙やさまざまな事件が起こります。そのつど、そのときのその子にとってどうなのかを考えあう。処罰しないで解決するのは時間もかかるし、大変です。でも、それこそが教育だと思います」

ある通信制高校の職員室

常に職員室開放

「いつもぐったりしている生徒の目が輝いていたね」「今度のテスト問題は子どもにとって考えやすいよい問題だったかな」。教員の間でどんなことでも話し合います。生徒の登校の日数は限られています。短い授業時間で一番伝えたいことは何なのか、教科の枠を越えて意見をかわします。職員室は常に生徒に開放されています。授業のない日も「遊びに」くる生徒が大勢います。

浦田さんはいいます。

「みんなが生きていてよかったと思える社会、そういう社会がありうるということを、ここでの時間を通してすべての子どもに実感してほしい。いろんな生徒がいるなかに自分もいて、いろんな先生がかかわってくれる。それが、すべての子どもたちに伝われば」

（つづく）